

メキシコ・ユカタン州からアメリカ合衆国 カリフォルニア州への移民

— マヤの人々による「移民の市民社会」構築の試み —

渡 辺 暁

メキシコからアメリカ合衆国への移民はひとくくりに扱われることが多いが、実際には多様性に富んでいる。特に南部を中心とする先住民村落出身の移民は、先住民言語や村の伝統的な組織を維持し、独自の社会を形成している。本稿では主として、2016年の12月にメキシコのユカタン州で、2017年の3月と8月にカリフォルニアのロサンゼルス周辺で行ったフィールド調査で得られた知見を元に、ユカタン州からアメリカ合衆国ロサンゼルスおよびその周辺のいわゆる南カリフォルニアへの移民の事例について、特に彼らの「市民」としての側面、あるいは彼らの「シティズンシップ」に焦点を当てて論じていく。なおここでは、この「シティズンシップ」ということばに二つの意味を持たせる。一つは公的な意味、つまり在留資格を巡る問題であり、もう一つは彼らが形成する「移民の市民社会」の中でメンバーとしての「市民」である。これら二つのアプローチから、ユカタン出身の先住民移民たちが、メキシコとアメリカを結ぶ移民の市民社会の中で、どのような役割を持っているのかを考察していく。

1 はじめに

メキシコからアメリカ合衆国への移民は、ひとくくりに扱われることが多いが、実際には多様性に富んでいる。特に、南部を中心とする先住民村落出身の移民は、彼らの言語や村の伝統的な組織を維持し、独自の社会を形成している。こうした先住民の移民については、「オアハカリフォルニア」という造語もあるように、オアハカ州からの移民がよく知られるが (Rivera Salgado 1998; Fox and Rivera Salgado 2004)、さらに国境から離れたユカタン州も、オアハカほどではないものの、多くの移民を送り出している。ユカタン州からアメリカ合衆国への移民は18万人程度 (Arredondo 2017; Noticiero Televisa 2018) と推定され、彼らの多くは、農村部出身のマヤの先住民である (Lewin Fischer 2007: 16)。

本稿では主として、2016年の12月にメキシコのユカタン州で、そして2017年の3月

と8月にカリフォルニアのロサンゼルス周辺で、それぞれ行ったフィールド調査で得られた知見を元に¹⁾、同州からアメリカ合衆国・カリフォルニア州への移民の事例について論じる。より具体的にいえば、本稿の目的は、ロサンゼルスおよびその周辺のいわゆる南カリフォルニアに移民したユカタンの人々の形成する社会について、彼らの「市民」としての側面から考察することである。

本稿ではこの「市民」あるいは「シティズンシップ」ということばに二つの意味をもたせる。一つは公的な側面である。当然のことながら、アメリカ合衆国における合法的な在留資格を持つか持たないかはその人の人生を大きく左右する。このアメリカ合衆国の「市民権」あるいは在留資格の重要性は、アメリカ合衆国の移民政策が厳しさを増す中、高まっているが、これについては本稿の第3節第2項で、2017年に調査を行った時点での、移民の人々の在留資格に対する感覚を紹介し、考察していく²⁾。

本稿で扱う「シティズンシップ」のもう一つの側面は、移民社会のシティズンシップ、つまり彼らが形成する「移民の市民社会 (migrant civil society)」の構成員という意味でのシティズンシップである。この「移民の市民社会」という用語は、政治学者のジョナサン・フォックスが、2005年にウッドロー・ウィルソンセンターで行われたセミナーでの報告用ペーパーの中で用いているものである (Fox 2005)。フォックスはこの用語について、「市民社会という用語は、あいまいな理論的なものである必要はない」と前置きした上で、「単純に言えば、移民の市民社会とは、移民主導の会員制組織ならびに公的な制度である (migrant-led membership organizations and public institutions)。より具体的には、移民の市民社会とは、4つのとても明白な (tangible) 集合的な行動の場 (arena) を含んでいる。これらの場一つ一つは、アクター達によって構成されるものであり、逆に言えばアクター達の集団 (set of actors) が、一つの場を構成している³⁾」と定義し、①同郷者クラブに代表される移民主導の会員組織 (Migrant-led membership organizations)、②移民主導のメディア (Migrant-led communications media)、③移民主導のNGO (Migrant-led NGOs)、④移民主導の自治を持つ公共空間 (Autonomous migrant-led public spaces)、の4つの類型を提示し、具体的な事例を論じている (Fox 2005: 5-10)。本稿ではこれにならない、カリフォルニアのユカタン出身移民による、さまざまな社会的活動について、紹介し考察する。

本稿の構成は以下の通りである。続く第2節では、アメリカへ移民したメキシコ・オアハカ州の先住民がつくるネットワークを対象に、彼らの支援のために社会活動を行いながら研究を続けてきた3人の研究者、ジョナサン・フォックスとガスパル・リベラ＝

サルガード、そしてリン・ステューブンによる研究をベースに、「移民の市民社会」とは何かを考える。続く第3節では、この「移民の市民社会」の概念を念頭に置きつつ、筆者自身が調査を行ったユカタンからの移民の特徴、特にオアハカ州やその他の州からの移民との違いについて論じ、筆者自身のフィールドワークの成果から、移民の市民社会あるいは公的な在留資格に関して、その様々な社会的意味について考察していきたい。最後の第4節では全体の議論をまとめ、本稿の貢献と今後の課題についてのべる。

なお、ユカタン州からアメリカ合衆国への移民に関する先行研究としては、アドラーがテキサス州ダラスに移住してきたユカタンのある村の出身者たちに対して行ったもの (Adler 2004)、メリダの CIESAS (社会人類学高等調査研究センター) に所属し、宗教集団の研究から移民のテーマにたどりついたフォルトゥーニー・ロレデモラらによる、移民の経緯や同郷者組織に関する一連の研究 (Cornejo Portugal & Fortuny Loret de Mola 2011, 2017; Fortuny Loret de Mola 2012; Mattiace and Fortuny Loret de Mola 2015)、ユカタン州のテルチャック・プエブロ (Telchac Pueblo) という町とカリブ海側のリゾート地コスメル (Cozumel) を行き来する、アメリカ合衆国への移民経験をもつ人々についてのベ＝ラミレスの研究 (Be Ramírez 2015)、そしてカリフォルニア大学サンディエゴ校のチーム (実際のインタビュー調査は学部学生が中心となって行っている) が、トゥンカス (Tunkás) という村で、2005年と2015年に行った調査の成果本 (Cornelius et al. 2007; Cornelius et al. 2015) がある⁴⁾。

またこのほかに、報道記事としては、2002年と2004年にアデルソンが、メキシコの左派系新聞ラ・ホルナーダ (*La Jornada*) に書いた、サンフランシスコのユカタン出身移民についての記事 (Adelson 2002, 2004)、フォックスとリベラ・サルガードの論文集に収められた、2000年頃から目立つようになったユカタンとチアパスからサンフランシスコに移民してきた、スペイン語を話さないマヤ系の移民についてのパークによるルポルタージュ (Burke 2004) が、ユカタンに関する先行研究でも引用されている。最近ではユカタン在住の二人のジャーナリストによる、カリフォルニアのユカタン出身者を追ったルポルタージュ (Sosa y Zapata 2017a, 2017b) や、メキシコ全国紙エルユニベルサル (*El Universal*) ウェブサイトの記事 (Arredondo 2017) などがあり、いずれも「カリフォルニアに移民したマヤの人々」について、多くの情報を提供してくれている貴重な資料となっている。

2 「移民の市民社会」とは何か

2.1 先住民移民がつくる「国境を越えた市民社会」—オアハカ州の事例—

移民の人々は、さまざまなかたちのネットワークを形成している。例えば、はじめて移民する人々の大多数は、家族や親戚、あるいは知り合いを頼ってアメリカに渡る。彼らに当面の宿や、場合によっては移住のための資金提供してもらったり、仕事を紹介してもらうことで、到着してからスムーズに新しい生活をはじめることができるのである。休日に集まってスポーツチームを作ったり、同郷者集団を作って文化活動をともにしたり、といった活動も、こうしたネットワークのよくある形である (Fox and Rivera Salgado 2004: 13-14)。

こうした移民の人々、特に先住民村落出身者のつくる社会について、フォックスとサルガードは、移民研究でそれまで使われてきた「トランスナショナルなコミュニティ」と「文化的シティズンシップ」という概念を元に、「トランスローカル社会におけるシティズンシップ」という概念を提示する。「トランスナショナル」を「トランスローカル」と言い換えることで、より具体的な「出身地と移住先をつなぐ」という状況が明らかとなり、「シティズンシップ」ということばにより、彼らがそうして作られるコミュニティの自立的なメンバーである、ということが示される (Fox and Rivera Salgado 2004: 26-29)⁵⁾。

スティーブンは、オアハカの先住民村落からの移民について、「先住民の国境を越えたシティズンシップ (Indigenous Transborder Citizenship)」という概念を提示し、先住民村落のさまざまなルールが、移民した村人たちと出身地に残った人々で作る、彼らの社会にとって、重要であり続けると指摘している (Stephen 2007, 2014a, 2014b)。具体的には、移民として村を出た人たちも、構成員としてとどまるのであれば、①村の様々な行政職 (cargos) をつとめ、②宗教的役職を通して祭りに貢献し (cargos religiosos, mayordomías)、③テキオ (tequio) と呼ばれる共同労働奉仕を行い、④適宜寄付をしなければならない。その代償として彼らに与えられるのは、①共有地へのアクセス権 (農耕あるいは家を建てる権利)、②共有の森林や水などの資源へのアクセス、③共同墓地に埋葬される権利、④村の集まりで発言し、意思決定過程に参加する権利、であると示す (Stephen 2014a: 47-48; Stephen 2014b: 118)、こうした紐帯が「国境を越えた市民社会」の構成要素の一つとなっていると指摘する。

こうした先住民の移民に関する理論は、移民たちの形成する、出身地と移民先をつな

く社会について、さまざまな示唆を与えるものである。フォックスとリベラ＝サルガードが指摘するように、移民たちの出身地の先住民村落は貧困地域であることが多く、また先住民言語しか話せない人々も多い。つまり経済的にも、そして政治・社会的にも疎外された存在である (Fox and Rivera Salgado 2004: 1-5)。ステューブンが transnational あるいは translocal のかわりに transborder という言葉を自著のタイトルに使っているのは、先住民の移民たちにとって越えるべき border は国境だけでなく、国内のさまざまな地域差や、社会におけるエスニシティや階層の壁など、さまざまな差別のことも指しているのである (Stephen 2004: 5-6, 19-23)。その一方でステューブンが指摘するように、先住民村落の内部のルールが、彼らの移民の市民社会にとって重要な紐帯の一つとなっているのであり、その意味でも先住民の移民という現象は、「移民の市民社会」の分析のために重要な事例となるのである⁶⁾。

2.2 オアハカの先住民移民の共同体：FIOB

オアハカの先住民は、同じ村出身者による同郷者集団や、アメリカで出会った言語や労働・生活環境を共有する同じエスニシティの集団を統合する形で、いくつかの連合体を組織しており、その一つが二国間先住民組織運動 (Frente Indígena de Organizaciones Binacionales: 以下 FIOB) である。この組織は元々 1991 年にミステコとサポテコの先住民移民たちによってミステコ・サポテコ二国間運動 (Frente Mixteco-Zapoteco Binacional: 略称 FM-ZB) として創設され、1994 年に他の先住民移民集団も統合して、二国間オアハカ先住民運動 (Frente Indígena Oaxaqueño Binacional) となり、2005 年にはオアハカ以外の先住民組織にも対象を広げ、同じ略称のまま現在の組織となった (Domínguez Santos 2004; Stephen 2014b: 119-120)。こうした組織が生まれてきた背景には、オアハカからアメリカ合衆国への移民がある程度の歴史を持つようになり、また残念なことではあるが、他の集団から差別されるという共通経験があったためであろうと、フォックスとリベラ＝サルガードは、彼らに大きな影響を与えたミステコ移民研究の先駆者、マイケル・カーニー (Michael Kearney) のことばを引用しつつ論じている (Fox and Rivera Salgado 2004: 12-13)。

2002 年にカリフォルニア大学サンタクララ校で開催された、「アメリカ合衆国における先住民移民—研究者とコミュニティーリーダーを結ぶ—」と題されたシンポジウムにおいて、FIOB の当時のリーダーのドミンゲス・サントス氏は、FIOB がマッカーサー基金やメキシコの先住民局 (Instituto Nacional de Indigenismo) の支援を受けて、人権・組

織化・法律についての教育およびトレーニングのプログラムを行い、アメリカ合衆国内では先住民移民に対する健康推進プロジェクトを行っていた、と話している (Domínguez Santos 2004: 72)⁷⁾。また、2017年8月に調査を行った時点では、FIOBは先住民言語の法廷通訳の育成プログラムに、オアハカ州政府の支援を受けて着手したところであった⁸⁾。

この現在のFIOBの他にも、1988年に発足して以来、オアハカの伝統的な祭り「ゲラゲツァ」をロサンゼルスで30年間にわたって開催している「オアハカ地方組織 (Organización Regional de Oaxaca: 通称ORO)」などの組織もあり (Rivera Salgado 1998)、オアハカ出身者による同郷者集団は、かなり大きな規模の活動をしていることがわかる⁹⁾。

2.3 ユカタンとオアハカからの移民の地理的・歴史的な共通点と違い

筆者がこれまで調査を行ってきたユカタン州からの移民の人々について、次節で考察していく前に、ここまで紹介してきたオアハカの事例と共通点と差異について、確認しておきたい。これら二つの州の共通点としては、メキシコの中央部よりは南に位置し、人口に占める先住民の比率が高い、また移民の歴史がメキシコの他の州 (サカテカス・ミチョアカン・ハリスコなど) と比べて比較的新しい、といった点が挙げられる¹⁰⁾。

しかし、二つの州からの移民という現象については、当然多くの違いも見られる。まず、入手できた範囲で最新の2010年の時点での統計では、オアハカ州出身の先住民系の移民がカリフォルニアだけで35万人程住んでいたのに対し (Rivera Salgado 2015: 121)、ユカタン出身の移民はアメリカ合衆国全体で18万人程度 (Arredondo 2017; Noticiero Televisa 2018) であると推計されている (州全体の人口も、オアハカがユカタンの約2倍である)。

移民が始まった歴史的な経緯も、オアハカ州とユカタン州では異なっている。オアハカ州からの移民は、1930年代にはすでにはじまっており、当初はメキシコ国内のベラクルスのサトウキビ農園や州都オアハカ市、そしてメキシコシティーへと向かっていたが、行き先はさらに北へと広がっていき、メキシコ北部のシナロア州やパハカリフォルニア州の農園を経由して、1980年代後半にはアメリカ合衆国への移民が本格的なものになり、90年代前半にはオアハカ出身者の団体ができるだけ「臨界質量 (critical mass)」に達した (Fox and Rivera Salgado 2004: 10-12)。実際、前述のFIOBの母体ができたのは1991年であり、さらにそれにさきがけて、1988年にすでにゲラゲツァ・ロサンゼルス

を開催できるだけの移民の集団があったわけである。

ユカタン州からアメリカ合衆国への本格的な移民の流れは、オアハカ州より少し遅れて1990年頃から本格化したといわれる。実はユカタン州は1942-64年に施行されていたブラセーロ・プログラムにも参加していたが、ユカタン州では中北部の州のように、ブラセーロによってその後も続く大規模な移民の流れが生まれるにはいたらなかった。また、オアハカの人々がもともと国内で移動していたように、ユカタンの人々も地域経済を支えていたエネケン関連産業の崩壊をきっかけとして、リゾート開発とそれに伴う都市化が急速に発展した、隣のキンタナロー州への移住が進んだ。こうした移住経験が移民の「学校」となり¹¹⁾、1990年代にははっきりと目に見える形で、アメリカ合衆国への移民が進んでいったのである (Lewin Fischer 2007: 15-17)。

次節では、こうした特徴を持つメキシコ・ユカタン州からアメリカ合衆国・カリフォルニア州への移民について、「移民の市民社会」構築の試みと、2017年の調査の時点に話を聞いた、在留資格をめぐるさまざまな状況の二つの観点から論じる。

3 ユカタンからカリフォルニアへの移民

3.1 ユカタン出身者による「移民の市民社会」構築の試み

筆者がロサンゼルスで調査をする中で、これまでインフォーマントとしてまた友人としてお世話になってきたのが、ユカタン州南西部のムナ (Muna) 市出身のサラ・サパタ = ミハレス氏である¹²⁾。彼女の父親はブラセーロ・プログラムに参加し、そのままカリフォルニアに移住したが、彼女はその父親の招きで、15歳の時にロサンゼルスにやってきた。最初に渡米したときから、グリーンカードを所持していた。

彼女がはじめてユカタン同郷者の団体を作ろうと思いついたのは、2002年のハリケーン・イシドロによってユカタンが甚大な被害を受けたときである。故郷の復興を支援するために活動をはじめた以降、ユカタン出身の移民の人々の世話役として活動するようになり、2004年にユカタン州ではじめて「トレス・ボル・ウノ (3x1)」プログラムを活用し¹³⁾、故郷の町に救急車を寄付した。きっかけは、彼女の父親が発作で倒れたとき、十分な治療を受けられないまま亡くなったことであった。もし救急車があれば、メリダの病院に運ぶことができて助かったかもしれないとの思いが、こうした寄付活動につながったのである。

筆者が彼女と初めて会ったのは、2006年の9月にロサンゼルスのコンベンションセン

ターで行われた COFEM（メキシコ同郷者連盟協議会：Consejo de Federaciones Mexicanas）の集会の時であった。彼女は当時、ユカタン同郷者クラブ連盟 USA（Federación de Clubes Yucatecos-USA）という、ユカタン各地の町の同郷者組織（Hometown Association）をつなぐ団体（Federation）を立ち上げ、その代表を務めていた（なお COFEM は、そうした州ごとの連盟の連合体の形で作られた組織である）。ユカタンよりも移民の歴史が古く、また数も多いサカテカスやハリスコ、ミチョアカンといった他の州の連盟に比べれば、規模もずっと小さかったが、それでもユカタン州からもいくつかの団体が参加していた。実はこのとき私は、荷物を運ぶなど、色々と会場の設営を手伝った。そのおかげで、彼女は私のことを信頼してくれるようになったように思う。

次にロサンゼルスで彼女の組織するイベントに参加したのは2010年のことだった。メキシコ独立200周年、メキシコ革命100周年の記念すべき年に、ロサンゼルスでも様々な行事が予定され、独立記念日に一番近い週末には、ロサンゼルスから、メキシコ系住民の多い地域の代名詞ともいえるイーストロサンゼルスに向かう、セーサル・チャベス大通りを行進する盛大なパレードが催された。私はもちろん調査のつもりで行ったのだが、当日会場に行ってみると、行進の人数が足りなかったため、筆者自身も彼女と、ロサンゼルス在住のグアテマラ人の彼女の友人と3人で、ユカタンの横断幕を持って一緒に行進することになった。グアテマラ人のもう一人の助っ人はともかく、ユカタンの民族衣装グアヤベラ（guayabera）を着ているとはいえ、どう見てもユカタン出身者には見えないアジア系の私の存在は、沿道を埋めた観衆の皆さんの目にはさぞかし奇異に写ったことだろう。

このエピソードからもわかるように、ユカタンからの移民でこうしたイベントに出て積極的に活動に参加する人は少なく、またサパタ＝ミハレス氏に対抗するような別のリーダーもいたため、連盟の運営は難航していた。2018年の時点での彼女はこうした活動は行っていないが、ムンドマヤファンデーション（Mundo Maya Foundation：マヤ世界基金）という団体を立ち上げてチカーノ絵画などの文化活動を支援したり、後述するように移民の人々の支援を折に触れて行っている。また一時期はメキシコ市の政府がロサンゼルスに設置した出張所、Casa del Distrito Federal（連邦区の家）の所長を務めていた¹⁴⁾。

3.2 在留資格をめぐるさまざまな取り組み

2017年3月、トランプ政権誕生後間もない時期に、私はロサンゼルスを訪ねた。それまでのロサンゼルス滞在時と同じく、前述のサラ・サパタ＝ミハレス氏のもとにお世話になった。第一線からは退いたとは言え、2017年3月の時点でもサパタ＝ミハレス氏はさまざまな活動を行っており、調査の半分は彼女のそうした活動に付き合わせてもらう形で行った。

このときはトランプ政権発足直後とあって、移民の人々のあいだに強制送還への不安が高まりつつあった。彼女はさまざまな場で、「不法移民にも権利がある」ということを説いてまわっていた。ロサンゼルスの弁護士会の主催する無料法律相談の会場では、私自身も相談に来るスペイン語話者とベトナム系の弁護士のあいだの通訳を務めたりした。参加した弁護士の多くは移民法が専門で、想定されていた相談者はグリーンカードや市民権の取得を希望する移住者であったが、飲酒運転の記録を消せないか、といった在留資格とは関係のない相談も見受けられた。

その翌日にはサパタ＝ミハレス氏は、ロサンゼルスから車で北西に1時間半くらいのサウザンドオークス (Thousand Oaks, Ventura County) に住むユカタン出身者を訪ねて、「もし移民局につかまったら何をすべきか (何をしてはいけないか)」についてのレクチャーを行った。たとえば、身分証明書などはきちんとそろえておくこと、すぐに連絡ができるように、最寄りのメキシコ領事館あるいは弁護士の電話番号を控えておくこと、また犯罪になるので、偽名は絶対使ってはならない、などの話をしてきた¹⁵⁾。この調査を行った時点 (2017年3月) ではまだ、サウザンドオークスの周辺では厳しい取り締まりは行われていなかったようで、参加者の方々 (ほぼ全員が「不法」移民であった) も、そこまで取り締まりが厳しくなるのだろうか、それほど強い危機感を感じていない様子であった。

このときの調査、そして2017年の8月に再び行ったロサンゼルス近郊での調査では、「不法」移民ではなく、「なぜか在留資格を持っている」幸運な人々にも出会った。例えば、州北部のテルチャック・プエブロ出身の男性は、自分自身は基本的にメキシコで育ったにもかかわらず、ヴェンチュラ郡オックスナードに農作業の出稼ぎに行っていた両親が手続きを行っていたおかげで、グリーンカードを保持していた。生活のベースは完全にメキシコで、結婚して仕事もしていたが、あるとき、1年以上アメリカを離れていたため、永住権が失効してしまった。「だめもと」でティファナから入国を試みたところ許可され、そのまま仕事も見つけてオックスナードに住み、妻を観光ビザで呼び寄せた。観

光ビザは、グリーンカードとは逆に、最長で滞在できる期間が6ヶ月と定められているため、妻は当初は半年に一度、里帰りしていたが、子供が生まれて帰国するのがおっくうになり、オーバーステイを続け、また観光ビザでは本来できないはずの仕事もはじめた。彼女は出身地のテルチャックの隣にあるモトゥル (Motul) という町の工業学校 (Instituto Tecnológico) でコンピューターサイエンスの学位を取得していたため、最初は現場の労働者として入ったタマネギ加工工場で、事務仕事を任されるようになった。その後夫は市民権を獲得し、妻の方もグリーンカードの取得を目指して手続きを進めている。

サパタ=ミハレス氏の義弟、マルセロ・マイ (Marcelo May) 氏も、ツァン (Dzan) というマヤ語が話されている小さな町で、長らく教員を務めつつ、休みの時期などにアメリカに出稼ぎに来ていて、同様にグリーンカードを所持していた。教員としては引退した彼は、2017年3月の調査のとき、市民権の取得を目指してアメリカに長期滞在中であった。マヤ語は話せるが英語は話せないため、インタビューに向けて音声教材で勉強していた¹⁶⁾。なお、前述のテルチャック・プエブロ出身の男性も英語は苦手で、市民権を無事取得したあと、宣誓式の前の最終チェックで係員に英語が聞き取れなかったのをとがめられ、心中おだやかではなかったと話していた。

このテルチャック出身の夫婦の事例や、サパタ=ミハレス氏の義弟のケースを見る限り、アメリカ合衆国の移民法制は、時として拍子抜けするほど寛容である場合もあるように見受けられる。こうした在留資格申請についてはさらに多くの事例を見ていく必要があるが、アメリカの移民に対する締め出しが、2017年の調査の時点においても、必ずしも言われるほど厳しくはない場合もある、ということを示す事例として、紹介しておきたい。

3.3 ユカタン出身者の組織的活動そして文化的・言語的独自性

サパタ=ミハレス氏は10年以上にわたって、安定したユカタンの同郷者組織を作ろうと活動を続けたが、2017年の調査の時点では活動を休止していた。彼女の作ったユカタン同郷者クラブ連盟がかつて加盟していたCOFEMには、2018年現在、別のユカタン州出身者の団体が加盟している¹⁷⁾。また、この組織のことを取り上げたユカタンの地方紙トリブーナ (Tribuna) の記事によると、この連盟は北カリフォルニア、つまりサンフランシスコ周辺を中心に活動し、47の同郷者クラブが集まり、合計すると800人のメンバーがいるそうである (Tribuna 2017)。

これらの組織については、今後コンタクトを取り、可能であれば調査を行おうと考えているが、紹介したサパタ＝ミハレス氏の活動の事例から言えるのは、連盟のような組織が実現しなかったとしても、さまざまな形でそうした組織を作ろうという動きはあるのだ、ということであり、また、その活動が必ずしも成功しなくても、別の形で活動を続けていることもある、ということである。

もちろん、町の出身者のクラブという規模であれば、いくつもの団体がある。たとえばリーマンショック前の2006年当時の話であるが、ユカタン州南部のペト市の出身者の団体が、移住先のサンラファエルという町だけで4つある、とのことであった¹⁸⁾。これらの団体の多くはスポーツや、文化的な活動を集まりの主眼としていて、特にハラナ(Jarana)という民族舞踊の、アメリカ合衆国生まれあるいはアメリカ合衆国育ちの若い世代への伝承は重要視されていた(Watanabe 2008: 50-51)。しかし、こうした団体がまとまってさらに大きな組織となっていくためには、さまざまな労力が必要であり、忙しい移民の人たちにとって、そう簡単なことではない。経済的な支援もない中、移民の人々が自分たちで組織を立ち上げ、それを維持していくには大変な労力が必要であり、必ずしも運営が軌道に乗るわけではない。家族や友人関係といったプライベートなネットワークと、オアハカの諸団体のようなパブリックなものあいだに、さまざまなかたちのネットワークがあり、それらもよりとらえにくい対象ではあるが、「移民による市民社会」の一部であることを、ここで指摘しておきたい。

最後に、こうしたユカタン出身の移民たちの文化的・言語的な独自性にふれておきたい。ユカタン出身の移民の方々と話をしていても、オアハカのような村のカルゴ(本稿2.1および、渡辺(2018)を参照)のような話は全く出てこない。そういう意味ではオアハカの事例とは異なるが、すでに述べたようにマヤ独自の文化文化(踊り・音楽・民族衣装・そして食べ物)を大切にする姿勢や、(全員がそうではないが)マヤ語話者であるということ、言い換えれば「自分たちはマヤである」ことを、重要であると考えている人たちが多い。最近のメキシコ全国紙エルユニベルサル(*El Universal*)の記事(Arredondo 2017)のweb版についている動画の中には、「いつかマヤ語が世界語になるかもね」と話す、マヤ語話者へのインタビューが出てくる¹⁹⁾。また実践的な意味では、1980年代初期のペトからの移民たちが、自分たちの越境を助けてくれたカトリックの神父をかばうため、入国管理局の取り調べに対し、マヤ語で口裏合わせをした、などのエピソードが伝えられており(Rodríguez n.d.: 29-30; 渡辺 2015: 74)、マヤ語という言語を共有することの重要性のもう一つの側面として、指摘できるだろう。

4 結びにかえて

本稿では、筆者がこれまで行ってきたフィールドワークを元に、ユカタン出身者の作るネットワークについて、オアハカの事例と比較しながら考察してきた。オアハカの事例とは違い、ユカタン出身者の組織化は、北カリフォルニアを中心に進んでいる模様ではあるが、ロサンゼルス近郊においては、少なくとも成功しているとはいえない。とはいえ、サパタ＝ミハレス氏の活動の軌跡を見れば、結果として安定した組織が生まれることがなくても、あるいはFIOBのように社会的・政治的なプレゼンスを持つには至らなくても、さまざまな形でコミュニティ活動を行っている人たちがいる、ということは、忘れてはならないだろうし、こうした活動も「移民の市民社会」のとり形の一つである、ということは、十分可能であろう。本稿がなんらかの貢献をすることができたとすれば、こうした見えにくいコミュニティ活動に多少なりとも光を当てようとした、という点があると、筆者本人は考えている。また、第3節の第2-3項でふれた移民の在留資格についても、偶然知り得た情報でしかなく、一般化は到底できないとは言え、移民のおかれた法的状況の複雑さを示す、興味深い事例であるといえるだろう。

今後の課題としては、今回は調査ができなかった、現在も活動を続けるユカタン出身者のコミュニティ、特にサンフランシスコ周辺のユカタン出身者のコミュニティについて、実際にメンバーの方々に話を聞いたりしながらその様子、あるいは成功の鍵を明らかにしていくこと、そして、いわゆる不法移民の方々について、彼らの声をアカデミックなメディアに届けるとともに、彼らにとってどのような未来があり得るのかを、考えていくことであろう。もちろんそうした調査を続けて行くにあたって、話を聞かせて頂く皆さんへの敬意を十分に払いつつ、またスティーブン（2014a: 51）が指摘するように、この世界に暮らす同じ「市民」として、彼らの生きる社会に、何らかの形で貢献をしていければと考えている。

謝辞

本論文は、科研費（基盤研究B「ラテンアメリカの国際労働移動におけるジェンダー・エスニシティによる国際分業の変容（16KT0096・代表：松久玲子同志社大学教授）」および基盤研究B「『想像の共同体』MexAmericaの構築をめぐる米墨の相克（17H04512・代表：山崎眞次早稲田大学教授）」の助成を受けた研究成果の一部です。

また本稿は、私が同志社大学人文科学研究所の第19期第11研究会（ラテンアメリカにおける国際労働移動の比較研究）に参加させて頂き、いろいろと刺激を受け、勉強させて頂い

たことの成果の一部、でもあります。参加者の皆様、特に代表の松久玲子先生、先生とともに研究会を中心となって支えてこられた、宇佐見耕一先生と Irene Andrade さん、そしてこの研究会に参加させて頂ききっかけを下された柴田修子先生には、本当にお世話になりました。厚くお礼を申し上げます。

注

- 1) これら3回の調査、特に2017年3月と8月の調査の成果については、その一部をすでに渡辺(2018)にまとめている。また本稿の議論のベースには、これら最近の以外にも、筆者が2006年頃からユカタンとカリフォルニアの両方で断続的に行ってきた調査、あるいは2003年から2年半にわたるアメリカ合衆国・コネチカット州での在外研究のあいだに生活の中で得られた知見も含まれる。これらの調査については、筆者のこれまで発表してきた論文その他の文章(渡辺2010;2014;2015)を参照されたい。
- 2) なお、在留資格については、その重要性は自明であると思われるので、第2節で述べる「移民の市民社会」についての説明は割愛するが、このテーマ、特にいわゆる不法(illegalあるいはundocumented)移民については、家族への影響を扱ったドレビーの研究(Dreby 2015)や、ロサンゼルス若者についての長期的な調査の成果であるゴンザレスの研究(Gonzales 2016)などがある。
- 3) 原文は以下の通り。Civil society doesn't have to be a fuzzy theoretical term. Specifically, this includes four very tangible arenas of collective action. Each arena is constituted by actors, while each set of actors also constitutes an arena. (Fox 2005: 5)
- 4) 最後にあげた、カリフォルニア大学サンディエゴのコーネリアス名誉教授を中心とする調査グループは、メリダの研究機関に所属するアルゼンチン出身の人類学者、レウィン＝フィッシャーを現地パートナーとし、カリフォルニア大学の学生を動員して非常に多くの項目のアンケートをインタビューとあわせて行うという研究手法をとっている。彼らの移民のプロセスからアメリカの政策の影響、移民しない人々が村に残る理由、地域発展や教育そして保健、宗教やエスニシティとの関連など、テーマは多岐にわたる。チームの主要メンバーのフィッツジェラルドの「マニフェスト」論文(FitzGerald 2012)によれば、移民についての社会科学的な調査の手法として、伝統的な人類学の手法である「厚い記述」は、小さな伝統村落を調査するには適しているが、これだけ大規模な現象の全貌を描き出すには不十分であり、逆に多くの数のアンケートを行ったとしても、多様性の中に埋没してしまうと批判する。それらの手法の欠点を補うため、周到な予備調査によって精選された、限られた数の調査地において綿密なアンケート調査を行うことで、移民という現象の原因をよりよく理解できる、と述べている。彼の言い方からいえば、本稿の筆者が行ったような調査はその期間も短く、データとして不十分なものかもしれないが、筆者としてはこれらの研究には出てこない、別の角度からの生きた情報を提供しているつもりである。この試みがどこまで成功しているか、については、読者の判断を仰ぎたい。
- 5) この本(Fox and Rivera-Salgado 2004)の内容については、渡辺(2007: 76-77, 83-84)で

より詳しいレビューを行っているので参照されたい。

- 6) なお、ここで参照した3人の研究者は、自分自身もミステコの出身であるリベラ＝サルガードが Centro Binacional para el Desarrollo Indígena という組織のリーダーを務めていたほか (Rivera Salgado 1998), 研究対象である移民の人々との関係性を非常に大事にし、移民の人々への貢献あるいは成果の還元について考えている人々である (Stephen 2014a: 50-51; フォックスの個人ウェブサイト [<https://jonathan-fox.org/> 2018年9月7日参照])。こうした姿勢も筆者は、フィールドワーカーとして見習うべき点であろうと筆者は考えている。
- 7) 研究者のみならず、市民団体やジャーナリストも多く参加して行われた、このシンポジウムのプログラムは、フォックスの個人サイトで閲覧可能である [<https://jonathan-fox.org/events/> 2019年1月31日参照]。なお、フォックスとリベラ＝サルガードの本 (Fox and Rivera Salgado 2004) は、このときの研究発表を集めた論文・講演集である。
- 8) この調査時の FIOB への取材については、渡辺 (2018) を参照されたい。
- 9) 筆者は2017年の30周年のグラゲツァを訪れたが、祭りの中心の伝統舞踊そのものに加えて、食品や民芸品の屋台、さらにはアメリカ合衆国市民権獲得を呼びかける移民団体のブースやロサンゼルス公共図書館のブースもあり、大変な賑わいを見せていた。ロサンゼルススペイン語新聞 *La opinión* によれば、このイベントには5000人以上の人出で賑わったという (Macías 2017)。
- 10) これらの共通点とともに、これら二つの州には、メキシコシティーからの物理的な距離や経済的な関係性の強さなど、さまざまな差異もある。オアハカとメキシコシティーの距離は500キロ弱でバスでも6時間程度、シティーに出稼ぎに行く人々も多いが、ユカタンは陸路でシティーまで行くと24時間近くかかる。近隣のキンタナロー・カンペチェ・タバスコ・チアパス州などと、メキシコ南東部という別の経済圏を構成していて、州都メリダはその中心であると言える。なお、このユカタン州とメキシコ南東部の地域としての特徴については、ユカタン自治大学の野口英世博士記念地域研究センター (Centro de Investigaciones Regionales "Dr. Hideyo Noguchi") のオトン・バニョス＝ラミレス (Othón Baños Ramírez) 教授に示唆を頂いた。また、同じ研究センターに所属するルイス・ラミレス＝カリーヨ教授もこれらの地域の中の人々の移動について、論考を発表している (Ramírez Carrillo 2015)。
- 11) ベー (Be 2015) によれば、ユカタンからの移民の流れは必ずしも①ユカタンの出身地→②カリブ海リゾートなどメキシコ国内の他の場所→③アメリカ合衆国となるわけではなく、アメリカから帰国してメキシコのリゾートなどにあらためて生活の場を求めるといったパターンもある。実際、筆者のインフォーマントの一人は、サンフランシスコ近郊のサンラファエルから出身地のベトに帰国したものの、故郷では仕事がないため、マヤ遺跡のウシュマルで働いたのち、カリブ海側のリゾートとして知られるプラヤデルカルメンで働き、数週間に一度、ベトの家族に会いに戻るといった生活をしている。なお、2018年秋頃からは、週末に食堂をはじめると、ベトに生活の比重を移している模様である。
- 12) スペイン語圏の名前で、二つの名字が並べて書かれているときは、通常父親の名字と母親

の名字であるが、彼女の場合、サパタが自分の父親の名字、ミハレスは夫の姓である。単に「ミハレス」とだけ名乗ることも多い。

- 13) 移民団体が故郷のインフラ整備等のために、資金を募って寄付をすると、連邦・州・市の3つのレベルの政府が同額の補助金を出し、元々の寄付金の4倍の金額が実際のインフラ整備に使われる、というマッチングファンド・プログラムである。詳しくは Watanabe (2008), 山崎 (2018) などを参照されたい。
- 14) 彼女がこの職に着いた時期は不明だが、2012年の選挙後、メキシコ連邦区長の交代に伴い退職したことは、2017年3月の調査時に本人より直接確認した。
- 15) より詳しい内容については、Zapata Mijares (2016) を参照。
- 16) マルセロ・マイ氏とは2018年12月にユカタンで再会し、市民権取得について、その後の顛末を聞いた。市民権取得に向けての最終インタビューでアメリカに滞在していた期間を聞かれ、うる覚えで答えたところ日付が間違っていて、おそらくそれが虚偽の証言と認定されてしまったせいで、市民権を取ることができなかった、とのことであった。もしそこで「わからない」と答えていたら、おそらく市民権を取ることができたであろう、とあとで他の人に指摘された、とも話してくれた(ユカタン州 Ticul 市のマイ氏の自宅における、筆者によるインタビュー、2018年12月)。
- 17) その団体の名称は、ユカタン同郷者クラブ協力連盟 (La Federación Alianza de Clubes Yucatecos USA [COFEM n.d.]) であり、COFEM のホームページに連絡先と、代表メンバーの氏名が記載されている (<https://www.cofem.org/yucatan-es/> 2019年1月31日参照)。
- 18) 筆者による移民へのインタビュー (2006年10月, サンラファエルにて)。
- 19) 当該の動画は youtube サイトでも見ることができる (El Universal, ""Cochinita dream": mayas toman EU," <https://www.youtube.com/watch?v=ciojx6HfjB4>, 2019年1月31日参照)。

参考文献

欧文

- Adelson, Naomi (2002) "La nueva migración indígena: Los mayas de San Francisco," *Masiosare* 255, (*La Jornada*).
- (2004) "El pasado se conecta con el presente," *Masiosare* 356, (*La Jornada*).
- Adler, Rachel H. (2004) *Yucatecans in Dallas, Texas: Breaching the Border, Bridging the Distance*. Boston: Pearson Education.
- Arredondo, Iñigo (2017) "Cochinita dream: mayas toman EU," *El universal*, 31 de enero, <http://www.eluniversal.com.mx/articulo/periodismo-de-investigacion/2017/01/31/cochinita-dream-mayas-toman-eu>, 2018年9月4日参照.
- Be Ramírez, Pedro Antonio (2015) "Migrantes yucatecos, itinerarios transnacionales y aprendizajes: la experiencia desde un escenario turístico," *Cuiculco*, vol. 22, núm. 64, pp. 63-87.

- Burke, Garance (2004) "Yucatecos and Chiapanecos in San Francisco: Mayan Immigrants Form New Communities," in Fox and Rivera Salgado, eds. *Indigenous Mexican Migrants in the United States*, 343-354.
- COFEM (Consejo de Federaciones Mexicanas) (n.d.) "YUCATAN," <https://www.cofem.org/yucatan-es>, 2018年9月4日参照.
- Cornejo Portugal, Inés, y Patricia Fortuny Loret de Mola (2011) ""Corrías sin saber adónde ibas": Proceso migratorio de mayas yucatecos a San Francisco, California." *Cultura y representaciones sociales*, Año 5, núm. 10, pp.82-106.
- Cornejo Portugal, Inés, and Patricia Fortuny Loret de Mola (2017) "Established and Recent Young Maya Immigrants: A Paradox Concerning Their Wellbeing." *Alter/nativas*, 7, pp.1-22.
- Cornelius, Wayne A., Micah Gell-Redman, Hillary S. Kosnac, Pedro Lewin-Fischer, Veronica Noriega (2015) *The New Face of Mexican Migration: A Transnational Community in Yucatan and California*. CreateSpace Independent Publishing Platform.
- Cornelius, Wayne A., David FitzGerald, Pedro Lewin Fischer, eds. (2007) *Mayan Journeys: The New Migration from Yucatan to the United States*. La Jolla: Center For Comparative Immigration Studies, University of California, San Diego.
- Domínguez Santos, Rufino (2004) "The FIOB Experience: Internal Crisis and Future Challenges," in Fox and Rivera Salgado, eds. *Indigenous Mexican Migrants in the United States*, 69-79.
- Dreby, Joanna (2015) *Everyday Illegal: When Policies Undermine Immigrant Families*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- FitzGerald, David (2012) "A comparativist manifesto for international migration studies," *Ethnic and Racial Studies*, iFirst Article, pp. 1-16.
- Fortuny Loret de Mola, Patricia (2012) "Migrantes y peregrinos de la luz del mundo: Religión popular y comunidad moral transnacional." *Nueva antropología*, vol. 25, no.77, pp. 179-200.
- Fox, Jonathan (2005) "Mapping Mexican Migrant Civil Society," paper prepared for Mexican Migrant Civic and Political Participation, Woodrow Wilson International Center for Scholars, Mexico Institute and US Studies Division, co-sponsored by: Latin American and Latino Studies Department, University of California, Santa Cruz, November 4-5.
- Fox, Jonathan and Gaspar Rivera Salgado, eds. (2004) *Indigenous Mexican Migrants in the United States*. La Jolla: Center for US-Mexican Studies, Center for Comparative Immigration Studies, University of California, San Diego.
- Gonzales, Roberto G. (2016) *Lives in Limbo: Undocumented and Coming of Age in America*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Lewin Fischer, Pedro (2007) "Yucatán as an Emerging Migrant-Sending Region," in

- Cornelius, FitzGerald, and Lewin Fischer, eds. *Mayan Journeys: The New Migration from Yucatan to the United States*, pp.1-26.
- Macías, Jorge Luis (2017) "Colorido festejo de la Guelaguetza en Los Ángeles," *La opinión*, 7 de agosto, <https://laopinion.com/2017/08/07/colorido-festejo-de-la-guelaguetza-en-los-angeles/>, 2018年9月7日参照.
- Mattiace, Shannan L. and Patricia Fortuny Loret de Mola (2015) "Yucatec Maya Organizations in San Francisco, California: Ethnic Identity Formation across Migrant Generations," *Latin American Research Review*, Vol. 50, No. 2, pp.201-215.
- Noticiero Televisa (2018) "Así ayuda gobierno de Yucatán a migrantes yucatecos," Televisa news, 29 de mayo, <https://noticieros.televisa.com/historia/asi-ayuda-gobierno-yucatan-migrantes-yucatecos/>, 2018年9月4日参照.
- Ramírez Carrillo, Luis Alfonso (2015) *Nuevos nómadas: Desarrollo regional, migración interna y empleo en el sureste de México*. México: Miguel Ángel Porrúa, Universidad Autónoma de Yucatán.
- Rivera Salgado, Gaspar (1998) "Radiografía de Oaxacalifornia," *Masiosare*, domingo 9 de agosto, <http://www.jornada.com.mx/1998/08/09/mas-rivera.html>.
- Rivera Salgado, Gaspar (2015) "From Hometown Clubs to Transnational Social Movement: The Evolution of Oaxacan Migrant Associations in California," *Social Justice*, Vol. 42, No. 3/4 (142), Special Issue: Mexican and Chicana Social Movements, pp. 118-136.
- Rodríguez Sabido, Luis Arturo. (n.d.). *Éxodo del Mayab a California*. Mérida: Gobierno del Estado de Yucatán, Instituto de Cultura de Yucatán, Conaculta, Pacmyc 2006.
- Sosa, Guadalupe y Thelmo Zapata (2017a) "El sueño californiano es como una pesadilla de concreto" y "El norte es una quimera para los que se quedan a esperar a familiares y remesas," <https://armando.info/Reportajes/Resume/2371;2374> (有料の購読者登録が必要: 筆者は著者より原稿を直接入手).
- Sosa, Guadalupe y Thelmo Zapata (2017b) "Persiguiendo el sueño americano: yucatecos en California," <http://reporteroshoy.net/>, 2018年2月20日参照.
- Stephen, Lynn (2004) "Mixtec Farm Workers in Oregon: Linking Labor and Ethnicity through Farmworker Unions and Hometown Associations," in Fox and Rivera Salgado, eds. *Indigenous Mexican Migrants in the United States*, 179-202.
- Stephen, Lynn (2007) *Transborder Lives: Indigenous Oaxacans in Mexico, California, and Oregon*. Durham and London: Duke University Press.
- Stephen, Lynn (2014a) "Migrants and Anthropologists: A Response to Gaspar Rivera-Salgado," *Latin American Perspectives*, Vol. 41, No. 3, (Indigenous Migration in Mexico and Central America: In the Footsteps of Michael Kearney), pp. 47-53.
- Stephen, Lynn (2014b) "Indigenous Transborder Citizenship: FIOB Los Angeles and the Oaxaca Social Movement of 2006," *Latin American and Caribbean Ethnic Studies*, Vol.

9, No. 2, pp.115-137.

Tribuna (2017) "Que Zapata saque las manos de asociación de migrantes," *Tribuna*, 25 de enero. <http://tribunacampeche.com/yucatan/2017/01/25/zapata-saque-las-manos-asociacion-migrantes/> 2018年9月4日参照.

Watanabe, Akira (2008) "Expanding Mexican Migrant Society and the Mexican Government," *Anales de estudios latinoamericanos*, No. 28, pp.31-63.

Zapata Mijares, Sara (2016) "Derechos de los inmigrantes indocumentados en EEUU" *Juntos: guía de inmigración*, Norwalk, CA: El Clasificado, pp.24-25.

和文

山崎 眞次 (2018) 「メキシコの新移民政策—マッチングファンド「3x1プログラム」の課題—」『ワセダアジアレビュー』第20号, pp.48-55.

渡辺 暁 (2006) 「書評論文 アメリカ合衆国のメキシコ系移民社会」『イベロアメリカ研究』Vol.28, No.1, pp.73-86.

———— (2010) 「アメリカのメキシコ系移民—国境を越えた市民社会を生きる—」『津田塾大学国際関係研究所報』第45号, pp.9-17.

———— (2014) 「コラム1 ある田舎町からの移民の歴史」「コラム4 メキシコ系ネイティブアメリカン?—マヤ語を話す移民たち—」三吉美加『米国のラティーン』大学教育出版, pp.61-64, 119-120.

———— (2015) 「メキシコからアメリカ合衆国への移民—ユカタン州の事例にみる出身地と移住先を結ぶネットワーク—」『ラテンアメリカレポート』第32巻1号, pp.68-80.

———— (2018) 「マヤとサボテコのロサンゼルス—カリフォルニアに住むメキシコ先住民の社会—」『ワセダアジアレビュー』第20号, pp.40-47.